

令和6年度第2回北区おたがいさま地域創生会議 会議録

1 開催日時 令和7年3月26日(月) 午後4時00分～5時52分

2 開催場所 北とぴあ 14F カナリアホール

3 議 事 1. 高齢者あんしんセンターにおける活動状況

(1) 令和6年度 地域ケア個別会議 開催状況について

2. 第1層生活支援コーディネーター活動状況

(1) 令和6年度 第1層生活支援コーディネーターの活動報告について

(2) 令和6年度 3圏域地域包括ケア連絡会報告について

3. その他

4 出席委員	藤原佳典会長	碓井 亘委員	阿藤 護委員
	岩脇彰信委員	平井孝明委員	小松栄美子委員
	大場栄作委員	ト部吉文委員	熊木慶子委員
	小原宗一委員	関谷幸子委員	村野重成委員
	尾本光祥委員	寺田雅夫委員	

【事務局】

お待たせいたしました。ただいまから東京都北区おたがいさま地域創生会議の令和6年度第2回の会議を開催いたします。

私は、事務局を務めます高齢福祉課長の新井でございます。どうぞよろしくお願いいたしますします。

本日は、委員から欠席のご連絡をいただいております。また、閉会のお時間によりましては、委員から途中退席なさると伺っているところです。

それでは、資料の確認をさせていただきます。事前に資料1から資料6－3までを送付させていただいておりますが、本日、資料をお持ちでない委員の方がいらっしゃいましたら、事務局へお申しつけください。

それでは、早速ですが、ここからの議事進行は会長にお願いいたします。

【会長】

皆様、お疲れさまでございます。

今日は年度末のお忙しいところ、お時間いただきましてありがとうございます。今日は、今年度最後のおたがいさま地域創生会議ということで、後半、多様な本当に興味深い事例のご報告とか、モデルの事業のご案内ということを楽しみにしたいと思います。

パラパラと拝見していますと、やはり後半のほうで、東洋大学さんとの連携という話が進んでいるということを知りまして、我々の東京都健康長寿医療センターも、このたび東洋大学さんと包括連携協定を結ぶことになりまして、一昨日、東洋大の先生方、特にライフデザインの先生方に当センターにお見えいただきまして、いろいろ各地でコラボができるでしょうということ。また、学生さんの場をあらはをお持ちですので、我々もまた北区を舞台にというところですが、いろんな形で地域の資源の一つとして、我々センターもご貢献できればと思っておりますので、ぜひよろしくお願いいたします。

それでは、早速でございますが、議題に入ります。

まず、高齢者あんしんセンターにおける活動状況について、事務局から地域ケア個別会議の開催状況について、ご説明をお願いいたします。

【事務局】

事務局です。資料の3をご覧ください。高齢者あんしんセンターに地域ケア個別会議という会議を年に全部で3ケース以上開催していただくこととしております。地域ケア個別会議は、多職種協働による個別ケースの支援について、自立支援に資するケアマネ

ジメント、支援ネットワークの構築について、そのケースから見えてくる地域課題について、把握・検討を行う会議です。

個別会議で把握された地域課題については、あんしんセンターが圏域の中で行っている活動等、把握した課題と併せて日常生活圏域における共通課題として、課題解決に向けた検討につなげるという立てつけになっております。

1 番、地域ケア個別会議の種類。2 種類ございますので、簡単に説明をします。

(1) 地域ケア個別会議というものについては、1 事例について、しっかり 1 時間程度、検討させていただく会議としています。この会議には民生委員さんや町会・自治会の方やボランティアの方など、地域住民の方も参加して検討を行っています。各高齢者あんしんセンターで、1 年間で 2 事例以上取り組むこととしています。

(2) 介護予防のための地域ケア個別会議です。こちらは、1 事例 4 5 分程度で多職種専門職による検討を行っています。各高齢者あんしんセンターで 1 事例ずつ出していただいております。

会議の概要としては、対象者ができること、したいこと、それと暮らす地域の活動やサポートなどの情報に着目して、自立、介護予防について多職種で検討を行っています。

取り上げる事例については、要支援認定者または事業対象者となっています。先ほどの(1) 番の時間を取って検討を行う事例については、要支援、要介護の認定、どちらかというのにはこだわっておりません。

戻りまして、助言者については、主任ケアマネジャー、理学療法士ほか、リハ職、あと管理栄養士、訪問看護師に入っております。

2 番、開催実績です。2 月末までの実施状況です。3 7 件を検討しております。うち、介護予防の事例については 1 6 件です。

(2) 事例の世帯状況、認知症の有無です。独居の方が 2 4 件、多くを占めています。認知症の有無については、認知症のありとなしと、割合は同じぐらいなんですけれども、介護予防の事例に関しては、認知症がない事例がほとんどでした。

(3) 居宅支援事業所に参加をいただいておりますけれども、事例提供、助言、傍聴合わせて、北区内の事業所には 1 6 事業所 3 1 名の方、北区外の事業所にも 4 事業所 5 名の方に参加いただいております。

裏面に参ります。3 番、その会議で挙げられた課題と考えられる取組をまとめております。①介護予防・日常生活支援から始まりまして、②生活支援体制整備、③認知症支

援など、全部で8分野に課題を分けて示しました。

左側が取り上げられた課題について、それと、今考えられる取組、実際にやっているものも含めた取組についてを示しております。

ピックアップしてご説明をします。

①介護予防・日常生活支援というところでは、お食事・栄養摂取に関する課題について取り上げられた事例が介護予防の事例の中で多かったです。口腔フレイルに関すること、それと移動に関する課題というのもありました。外に出かけたい気持ちと、出かけられる場所はあるけれども、北区の特徴もあり、坂道とか、そこを一人で歩いていくことの転倒の不安などという話がありました。

次の①介護予防・日常生活支援と②生活支援体制整備共通というふうに区分けしたところに参ります。

事例の中の課題の多くには、場とか、活動の内容に関する課題が挙げられました。やはり、高齢者だけということではなくて、多世代交流、それと男性が出かけられる場所がなかなか情報がないなというようなことが話題になりました。

もう一つ、短期集中型サービスという事業を北区ではやっていますけれども、そこに通っている方の卒業後の活動場所へのソフトランディングについても話し合われた事例がありました。

次のページに参ります。

③認知症支援というところでは、認知症に関する理解や地域でのつながりを持ち続けること、それと気づきや見守りというものが挙げたかなと思います。

事例の中には、街の電気屋さんが意外とご本人の生活の困難状況を把握しているなどという見解もありました。テレビがつかない、エアコンがつかないといって、リモコンをそれぞれ違うものを使っていて、うまくつかなかったりということがお家の中に入って分かったというような事例もありました。

④番、在宅医療・介護連携推進です。比較的多かったなと思うのが、高齢者の親御さんと65歳未満の障害をお持ちの方の事例でした。それぞれケアマネジャーさんが違い、ご本人たちの了解がないと、それぞれに入っている支援の情報がうまく通らないとか、やり取りが難しいというようなことがありました。

⑤権利擁護については、比較的多い課題でしたが、金銭管理にも課題が挙がっています。成年後見制度が地域福祉権利擁護事業につながるまでの金銭感覚に困り事が多いと

いう現状がありました。

裏面に参ります。⑥孤立・孤独というところでは、今のソフト面のつながりはありつつ、緊急通報システムに関しては、北区のシステムは今、固定電話での利用になっていて、また違う形での見守りというものも考える必要があるかなというような課題が出されています。

⑦地域共生・他（多）分野、外国人の方のコミュニケーション、交流の場という課題が挙がっています。

最後、⑧番ですけれども、高齢者になって火の元の管理が心配だったけれども、都営住宅にお住まいの方は、IHの機器に変えようとしたときに、電気容量が低くてそこに変えられず、そこは何とかなるといいかなというようなご意見も出ていました。

今回、課題はいろいろと挙がっていて、取組も右側のほうに各高齢者あんしんセンターでやっているものもあります。その中で、やはり交流の場とか、活動、通いの場についてというのが、どのケースにも多く共通しているなというところがありましたので、第1層のほうの地域課題の検討・共有という中でも取り上げて、来年度の取組に結びつけたいと考えているところです。

地域ケア個別会議に関しては、以上になります。

【会長】

ありがとうございました。ご説明に関しまして、ご質問、ご意見いかがでしょうか。

【委員】

1点よろしいでしょうか。

確認なんですけれども、3ページ目の一番下の権利擁護という表の中で、公的なサービス、つまり金銭管理をサポートしてくれる人がいないということなんですけれども。この金銭管理ということが、ちょっと私、理解できないので、ちょっとすみません、教えていただければうれしいなと思います。

【会長】

事務局、お願いいたします。

【事務局】

北区の特徴でもあるかと思うんですけれども、お独り暮らしとか、身寄りがなかったり、あるいは疎遠だったりして、日常の金銭管理を、お買物に行ったときにうまくお金が使えないとか、なくしてしまったり、しまい込んで分からなくなってしまうたりとい

うことが、高齢者の場合には発生していることが多いです。日常の金銭管理という部分ですね。そのことに関して、誰かが管理をしてあげたほうが安全なのかなというようなことを支援者側としては気づくことが多くて。

ですが、実際にじゃあ、例えばケアマネジャーとか高齢者あんしんセンターがお金を預かるということができないんですね。ご本人の権利を守るという意味合いも含めまして。そこのちょっとしたサポートがあると、うまくお金を適切に使うことにつながるんじゃないかなというふうに私たち、感じる部分もあるんですけども、成年後見制度というようにしっかりとした公的な制度とつながるまでの間がちょっと長いかなというような感触を伺っております。

【会長】

委員、いかがでしょうか。

【委員】

ありがとうございました。

【会長】

委員、お願いします。

【委員】

地域ケア個別会議を令和3年度から、もう4年間やっていただいています、たしか地域ケア個別会議という、何か国が出している図の・・・右側のところには、政策形成のところまで至るのが地域ケア個別会議ですよというところになっているのかなと思ってまして、僕の中では。今、委員のほうからも権利擁護だとか、つなぎ先がないとか、そのここが困っている的な、そういうところを北区として政策形成のところまで落としていくのがこの会議の大本の目的なところであって、そこをあんしんセンターさんには、こうなるといいなというのを描くのはとても大切なことかと思うんですけども、その政策形成のところまで何か至るような、4年間やられてきての、何かこういうところまで北区として制度として結びついたことがありましたら、教えていただけるとありがたいです。

【会長】

事務局、いかがでしょうか。

【事務局】

やはり北区の特徴として、独り暮らし高齢者が多い。特に、身寄りがない方が多いと

いうところを踏まえまして、その方の終活支援ですとか、終活サポートというのは、区としても大変重要な課題という。特に、今後の地域包括ケアを進めていく上で、その支援をどうするかというところが大きな課題というふうに捉えていますので、今、各包括支援センターのほうで、いろんな手を差し伸べながら、社協のほうにつないだりとか、そういったこともしながらも、やりきれない部分をケアマネジャーさんもそうなんですけれども、いわゆる影のシャドーワークという形でご支援いただいているということは、区のほうも認識はしています。ただ、今後、そういった方をどういうふうに具体的な支援にしていくかというところは、区としても本格的に次年度から検討していくというふうに今、捉えているところです。以上です。

【委員】

ありがとうございました。本当、今4年、来年5年という実績が追加されてきていて、いろんな課題が出てきているかと思うので、それをあの図の右側の政策形成、北区としては、こういう課題がいっぱい上がってきているので、北区としては、こういうところをやっぱりフォローしていかなきゃいけないよねというところまで結びつけるのが、地域ケア個別会議の大本の目標なのかなと思うので、課題の抽出だけではなくて、北区としても、そういうところまで結びつけるまで今後、お願いしたいと思います。

以上です。

【会長】

ありがとうございます。今、お二人の委員からコメントいただきましたけれども、それに共通して、やっぱりもともとは介護・福祉の専門家の得意な領域と、ちょっと知識が乏しい領域というのがあるかと思うんですね。先ほど、委員おっしゃったような金銭管理とかお金の問題とか、終活もですけども、なかなかそういったところを区の専門職の方だけがいろいろサポートしていくというのは、なかなか難しいところはあるかと思うんですね。

一方、特にお金の問題、これは日常の金銭管理のことから、さらに預金、貯金とか、そうしたもので含めて今、結構、銀行さんとか、日銀とか、信託銀行とかが、かなり住民さん向けのレクチャーとか講座なんかをやったりしていると思いますので。私は、幾つかそういったところの事例も知っているんですが、非常に分かりやすく、教材も分かりやすく、さすが企業さんが作っているもので、そういう教育もされて、まず、備えましょうというようなところから、ここからは地元でご相談してくださいみたいなこ

とで、地元のお客さんであるなしに関係なく、マイク持って講義されるというようなことが多いかと思います。

終活なんかでも、生命保険会社さんでもやっぱりそういったものをやっていますので。やっぱり企業さんとの連携で、そういったところを共にしていくということが大事だと思いますし、恐らく単発で包括さんが、そういう金融業ですとか保険業の方と、たまたま1こまやってもらうとかいうのは、そういう点での接点はあるかと思うんですけども、もっとやっぱり企業さん、金融に関して、あるいは保険会社には総合的な知というものを持っていますので、こういったものこそ区レベルで、じゃあ、総合的にどういう面、啓発していったらいいのかとか、どういうところが住民にとって必要なところなのかという点のところまで、相手のほうはいろいろそういう土俵に上がっている場合が多いです。活用されていくというところもこれから検討されればいいんじゃないかなと思いましたけれど。ちょっと今の話の関係で、ちょっと助言させていただきました。ありがとうございます。

ほかはいかがでしょうか。

では、よろしいでしょうか。ひとまず、地域ケア会議の個別会議に関しては以上とさせていただきますして、(2)の令和6年度の第1層生活支援コーディネーターの活動報告について、北区社会福祉協議会から説明をお願いいたします。

また、質疑応答は、資料4から資料の6-3までの説明終了後にまとめて伺いたいと思います。

では、委員、お願いいたします。

【委員】

資料4で、この後、説明をさせていただきます。

まず、これからご報告するのは、生活支援体制整備事業に基づく第1層生活支援コーディネーターの活動報告という形となります。生活支援体制整備事業というのが、国のほうは、介護保険の体制の中で、平成26年から介護予防を介護保険の制度の中だけではなくて、住民参加で介護予防を進めるような街づくりを進めましょうということで予算化をされて、生活支援を進めるためのコーディネーターと、あと、地域でつくる協議体というもので、それを進めましょうというような事業になっています。

北区の場合は、16の地域包括支援センターに、それぞれ2層の生活支援コーディネーターさん、今日も来てくださっていますけど、いらっしゃるところに、第1層という

のは区全体を見るというような、そして、2層の生活支援コーディネーターの方をサポートするのが1層の生活支援コーディネーターという役割で、これは社協が受託をさせていただいておりまして、そこの活動のこれから報告ということになるんですが。

この事業が大体、今、10年ぐらいたって、地域の中でいろいろな取組が進んできているところなんですけれども。一方で、10年たつと、2層のコーディネーターの方たちもどんどん入れ替わりがあったりとか、地域の中の状況も変わってきたりということ。このおたがいさま地域創生会議は、北区全体のことを取り扱う会議なんですが、16のエリアでも、それぞれ地域での包括ケアに関する会議の中で、そういったことを話し合っていたっているんですが。

それと16と1の間で、北区の場合は、圏域を三つに分けて、赤羽、王子、滝野川という形で、これまで合同でいろいろな地域のことを話し合う場を持ってきたんですけども、ここについて、ここ数年、今まではそういうふうに来てきたけれども、実は同じような近いエリアでも、状況とか生活ニーズとか、地域の状況がかなり違ってというところもあって、エリアだけで分けるだけがいいのか、あるいは、もうちょっとテーマとか、あるいは状況に応じた話合いを進めたほうがいいのか、ここ数年間、そんな話をかなり進めてきていて、そのことで、この一、二年、どんな形で進めたらいいのかということをして16の包括の皆様方と1層とで話合いをしてきて、その方向性ですとか、これからどういうふうにやりますよという辺りを含めて、これから菅野のほうからご報告をさせていただきたいと思っておりますので。

ここからは画面を見ていただいて、また、資料、スライドを使って、その経過と今後の進め方について、ご報告をさせていただきたいと思います。

【生活支援コーディネーター】

令和6年度の第1層生活支援コーディネーターの活動計画として、こちらの五つのほうを4月から取り組んでまいりました。今回は、この一番力を入れて取り組んでまいりました5番の区・1層・2層の協働による、地域課題への効果的なアプローチに向けた取組について、報告をさせていただきます。

1回目の地域創生会議でも少し触れさせていただいたんですが、今回の取組に至った経緯を簡単にもう少し説明のほうをさせていただきます。

右側が前回、北区における地域ケア会議と協議体の図です。下から上の流れとなっていて、16か所の各地域包括支援センターで地域ケア個別会議や地域包括ケア連絡会で

出た課題を王子、赤羽、滝野川という三つの近隣エリアで、広域での地域包括ケア連絡会という形で開催しております。

今までの流れでは、地域ケア個別会議で挙げた課題を近隣エリアであっても、集約していくのがなかなか難しくて、また、地域の中の課題は一つではないため、どのような課題に焦点を当てていくのが非常に苦慮していたという経過がありました。そのため、地域課題を北区全体で集約をし、テーマを絞り、全体で取り組んでいけないかという効果的なアプローチ方法について検討してまいりました。

まずは高齢福祉課、長寿支援課、1層生活支援コーディネーター、2層生活支援コーディネーターの方の中から代表者3名という4者で会議を重ねて、課題抽出会議という形で開催をさせていただきました。北区全域、・・・またがっている内容も含めて、課題を一度全部出して、その上で絞り込みを行っていきました。それぞれの視点から課題を挙げてみるという見える化をまず試みて、その後、こちらの課題分類シートで挙げた課題を大項目ごとに分け、どのような大項目、分野がたくさん挙げられているのか、見える化を試みたという形です。

先ほど、事務局の方からもご説明していただいた、地域ケア個別会議の報告で出された内容も、今後、こちらの課題分類シートに追加し、令和7年度以降に課題を抽出していく仕組みづくりにしていければと考えております。

令和6年度の課題分類シートから、体制整備事業に係るところを分析した結果、人と人がつながる場についての内容が多いということが見えてきました。介護予防、孤立予防において、・・・認識の共有までは専門職の方々も地域の方々もできているのだと感じております。ですが、実際にそのような場については、徒歩圏内に集まりがない、あっても参加者が固定化してきて、新しい人が参加しにくい、これ以上あんしんセンターが関わって新しいサロンをつくっていくのは限界、作りたくても、そもそも活動場所がないなど、皆さんが課題と感じていることが多岐にわたっていることも見えてきました。

そこで、令和7年度からは北区全域で、孤立しがちな高齢者が社会参加できるような「気軽につどえ、つながる場」を共通テーマとし、生活支援コーディネーター、地域住民、専門職みんなで考える1年にしたいと考えております。一言で「気軽につどえ、つながる場」といっても、皆さんがイメージするものは様々かと思います。そのため、まずは皆さんのイメージが湧くようなキーワードをこちらからちょっと書かせていただい

ています。

来年度、各高齢者あんしんセンターのエリアの地域の住民の皆さん、ケアマネジャーさん、専門職の皆さんも一緒に、このキーワードからイメージする自分たちのエリアの「気軽につどえ、つながる場」について意見交換をしていくところから、まずは始めて行きたいなと考えております。

このテーマを地域の皆さん方と話し合い、その後、検討していきたい内容として、1、まずは地域の誰でも気軽に社会参加できる場というのはどんな場かという分析です。例えば、予約制のサロンだとハードルが高くなってしまいますし、プログラムがしっかりしているサロンだと、出入りが自由にできないという、それで行きにくいというような声も耳にすることもあります。

2番は、場の分析を経て、具体的な数字のイメージの共有です。例えば、自分のエリアは、坂の上と下とで人の流れが変わってくるので、上に一つ、下に一つ必要という声もあるかもしれません。どのくらい数があればいいか、どんな場所なら行きやすいかなども共有できればと思っております。

3番は、場の機能は、どんな機能があれば行きやすいだろうという話です。機能というと、硬い話になってしまうのですが、例えば、居場所に一人で参加でも、つながり役としてくれる、ちょっとおしゃべりな地域のおばさんみたいなのが一人いてくださると、ちょっと違うな、なんていう声も聞きます。つながる場というのが一つキーワードになってくるので、どんな工夫があれば、初めての人でも参加しやすいのかということも考えていければと思っております。

4番は、見える化の話です。地域には、地域の人が小ぢんまりと集まっているものも含めて、たくさんの「気軽につどえ、つながる場」があるのですが、そんなのがあるの知らなかったという声も実はよく聞きます。どうしたら孤立しがちな人たちにも、そのような場があることを届けられるか、そんな検討もしていきたいと思っております。

令和8年度は、令和7年度に地域で話し合い、分析した結果から課題をさらに抽出し、今までやっていた圏域での話合いから形を変え、テーマ別で、より少しでも課題にアプローチできるようなチャレンジをしていく年にしたいと思っています。1年で解決までたどり着けるかなというのは、ちょっと正直、私も簡単ではないかなと思っているんですけども、創生会議の委員の皆さん方にも、ぜひ機会がありましたら、そのような地域でやる会議にも参加していただいて、一緒に「気軽につどえ、つながる場」を広げて

いっていただければと思っております。

以上が今年度の1層生活支援コーディネーターの事業報告とさせていただきます。

あわせて、資料5のほうに、お手持ちの資料5のほうなんですけれども、2層の生活支援コーディネーターの方々の活動報告を毎回、社会福祉協議会のフェイスブックに不定期に上げさせていただいているんですけれども、そのまとめを抜粋して入れさせていただいております。一番トップに載っているものが、前回、創生会議で阿藤会長に紹介させていただいて、滝西カフェが、まさに「気軽につどえ、つながる場」だろうというようなところで、私も早速見学に行かせていただいて、そちらのほうも報告を入れさせていただいております。ぜひ、後でご高覧いただければと思います。

私からの報告は以上です。

それでは、(2)番のほうに、このままちょっと移らせていただきまして、令和6年度の王子、赤羽、滝野川で行いました地域の包括ケア連絡会の報告のほうをさせていただきます。ちょっとパワーポイントを切り替えさせていただきますので、少しお時間いただきます。

【豊島地域包括支援センター】

それでは、王子圏域の地域包括ケア連絡会の報告をさせていただきます。

王子圏域では、地域のつながりの大切さPart Vというところで、おたがいさまな寄り添い方という、今回は副題にいたしまして、話し合いをさせていただきました。10月31日に、こちらの北とぴあで開催をいたしました。

これまでの王子圏域の包括ケア連絡会について、振り返りをしながらと思っておりますが、地域のつながりの大切さというテーマを考えたのは令和2年度になります。コロナがかなり蔓延して、なかなか集まるのも難しくなった時期でした。ただ、この連絡会は開催するということが決まっていたので、いかに少ない人数でどういった話し合いをしようかなということがなかなか課題でありましたが、コミュニティドクターの先生をお招きして、シニアクラブとか、活動をなかなかできないといった団体さんもありましたので、気をつけながら活動する。ノウハウとかも共有させていただいて、実際にこの会議の後に、コミュニティドクターの先生がシニアクラブの会場に行き、ご指導をいただいたみたいな実績が出たような令和2年度でした。

令和3年度が、まだコロナの中ではありましたが、そうはいいながらも活動を続けているいろいろな団体がありましたので、その団体の代表の方にお集まりいただい

て、・・・使ってサロンを継続しているとか、広報誌を利用していろいろな活動をしているというのが、元気が出るような活動の報告いただいたのが令和3年度になります。

続きまして、令和4年度、孤立をささえるコツということで、やはりずっと地域のつながりの大切さというテーマでやり続ける中、やはり孤立というところは、テーマとしてずっと続いていましたので、孤立について、実際に向き合ってみようかという話になりまして、孤立事例とかを用いながら、皆様に集まっていただいて、諦めずに声かけを続けることとか、地域の中でそっと見守るということなど、ご意見をいただきました。

令和5年度も同じように孤立せずに暮らすにはということで、認知症すごろくを活用して、世代はいつもより若い世代、50代とか若い世代にも入っていただいて、地域の実際に活動している方々からいろいろなご意見をいただいて、長期的な接点を持つことが大切で、つながりたいというふうに思いましたというような感想をいただいております。

今回なんですけど、おたがいさまな寄り添い方というところで開催していただきます。昨年度と同じように、若い世代の方も今回もご参加いただいて、あんしんセンター、各5人ぐらいずつに地域でいろいろな活動をされている方たちに声かけさせていただいて、30名ほどでお話しを行いました。

最初に、まず自己紹介というところで、はじめましての方が多いので、アイスブレイク的な意味を含めまして、こんなとき、どこに相談すればいいかなというようなお話をクイズ形式でさせていただきました。家族の様子が何かおかしい、救急車を呼ぶか迷うときはというようなところで、かるたみたいに答え合わせをするような、ゲーム形式にさせていただきました。

それを今、お手元にはないんですが、画面に映させていただきます、こんなときどうすると、チャートまではいかないんですが、具体的に近所の方から粉をまかれる、盗聴されるという妄想的なお話があったときに、どこに相談したらいいかなとか。お金を借りていて、自転車操業になっているみたいだけど、そういうときはどことか、具体的なエピソード、あんしんセンターに入り込んでくるような具体的なエピソードを交えたシートを作って、一応答え合わせみたいな形で、アイスブレイクをしながら、開始をしました。

その後、グループワークというところで、事例の紹介をさせていただきましたが、まず、三つ事例を紹介させていただきながら、グループワークをしていただきました。

まず、一つ目の事例というところで、今回は、おたがいさまな寄り添い方というテーマでしたので、皆さんが実際に地域の中で、どのように地域と関わっているかというような視点からお話をいただけたかなと思っています。

一つ目、近隣住民から、近所の高齢女性のごみ出しに混乱している。毎朝、ごみステーション付近に立っているので心配だというお話が。こういう場合、見かけたらどうしますかというお話をさせていただきましたが、多くの方が「お声をかける」という答えが多かったんですが、中には、家族に連絡したり、あんしんセンターに連絡したり。中には、知らない人だとやっぱり声かけづらいわというところで、いろいろな話が出たり。あとは、北区のほうがプラスチックごみが最近、分かれるようになったので、それで混乱している人が多いわよね。また、戸別収集の方が家の前にごみを出しています。ただ、よかれと思って、近所の方がそれをお手伝いしようと思ってすると、安否確認の意味を含めて戸別収集をしていただいているので、それは困るみたいな話が出たり、いろいろな地域の中で、実際に動いていらっしゃって感じていらっしゃることとかをお話合いいただけたかなと思います。

続いて、事例②、地域の中で気になっていたお家。近隣の方が工事会社が入っているのを不審に思い町会長さんに相談。リフォーム詐欺に実は遭っていたんだよ。こんな家がもし近くにあったらどうしますというお話なんですが。町会さんとかに相談するとか、役員会とかで町会にも上げられる方はいらっしゃるけど、逆に、そういう方は被害に遭うことを隠しがちだよねとか。なかなか気になっているけど、どのように関わりを持ったらよいか分からないかなというようにお話が出ている中、できるだけ網目を多くして、抜けない関係性が大事だよねというようにお話が地域の方から聞かれています。

③番目の地域の方から、向かいのお家は、ふだん裏木戸を閉めているのに、今朝は開いているので様子がおかしい。こういうときどうしますかという話なんですが、しばらく様子を見るという方もいらっしゃったり、いろいろしました。

もう一つ、どうしますかだけではなくて、今度、自分が訪問される側だったら、どの程度関わってほしいですかという質問をさせていただいたんですけれども、なかなか、結構いろいろ意見が、こちらは割れました。関係性にも、もちろんよるかと思いますが、1日ぐらい閉まっているからって、声をかけてほしくないよという方もいらっしゃれば、やっぱり、うるさいなと思ってしまう方。だ、自分がやはり病気だったりした場合は、とてもありがたいというように話をされていました。

やっぱり自分事として考えるという機会はなかなかないのかなと思ひまして、地域のつながりの中ということは、いろいろご支援されているけれども、じゃあ、それを自分に当てたときに、どのように思うかなというのは、なかなか人それぞれで、今回、そういうことを考えるいい機会になったというようなお話があったと思います。

また、これらのいろいろな事例の中でお話ししているところで、ほかの町会さんとかで、班をつくって見守りをしている事例があって参考になったとか、自分たちの地域ではやっていないことを話を聞くことができてよかった。気になる方を見つけ出すこと、気かけられることが相談に必要だと思ったとか。あとは、若い世代の方からですけど、近所とのネットワークの構築が大切だと感じたとともに、世代によって関わり方が変わるデジタル化を進める必要があることも感じたといったご意見がある中、最後にグループの皆さんから、地域のつながりが大切と言っているのが印象的だった。一人一人の目が様々な犯罪や困り事に気づき、最初の入り口になると思うといったような、いろいろな気づきがあったかなと思います。

同じように、アンケート結果からも、同じような内容ではありますが、あんしんセンターとか民生委員さんも連絡して、パイプ役になっていただくことを学んだということでしたり、地域の仕組みを知らない方が多い。世代の意識を持っていくことも大切かなとかありました。

あとは、男性の参加者がやっぱり数名でしたか、いたんですが、やはりそういう男性参加者がほとんどいない、その辺を努力したほうがいいんじゃないかというようなアドバイスもいただいたりしておりました。

最後に、生活支援コーディネーターとしてというところではありますが、自分の地域以外のいろいろな立場、世代の参加者同士が交流し、・・・話し合う協議会にはなったとは思っております。また、支援される側の活躍の視点を持つということがコーディネーターとしても大切だということを改めて感じさせられております。

あとは、若い参加者から、i P h o n e の機能を利用して見守りをしたいという意見もあったり、いろいろな新しいことを考える機会もあったかなと思っています。

本当に、街でいろいろなつながりを持っていらっしゃるノウハウをやはり皆様と共有することで、またいろいろな次につながるという機会にもなるかなと思ひまして、今後とも地域で支えている方々とともに、一緒に安心して暮らせる地域づくりを目指していきたいなということをコーディネーターとしては振り返らせていただきました。

以上になります。

【生活支援コーディネーター】

王子圏域からの報告は以上になります。

続きまして、赤羽圏域の報告をさせていただきますので、ちょっと切り替えにお時間いただきます。

【浮間地域包括支援センター】

続きまして、赤羽圏域地域包括ケア連絡会、令和6年度の報告をさせていただきたいと思います。

赤羽圏域もやはりシリーズ化というか、そういう形で、令和6年度のテーマ「地域のつながりを広げよう」PART4ということで、東洋大学の学生さんとのつながりについてという話をさせていただいております。こちらは、令和6年12月7日土曜日、10時から11時半で、地域の方であるとか、東洋大学の学生さん、先生、ボランティア支援室の職員さんなどにも参加いただいて、赤羽会館大ホールで開催させていただいております。

この取組、令和3年度から取組をさせていただいているんですが、今までの創生会議のにご報告している内容とかぶる部分がございますけれども、令和3年度のところでは、東洋大学の学生さんと地域で活動する方のお見合い大作戦ということで、学生さんに自主グループを紹介させていただいて、参加いただくというところを狙ったんですが、つながるというところにまでは至らなかったかなという状況がございます。

令和4年度に関しましては、そのつながらなかった理由は何だろう。お互いのことをまだよく全部理解できていないからだよねということで、お互いを知るということに関して、お互いの思いであるとか、そういった地域活動に関する考えであるとか、そういったことを話し合う連絡会とさせていただきました。

そういったお互いの気持ちを確認し合っというところで、引き続き令和5年度のほうにおきましては、まず、活動しているグループに学生さんが入っていくという、一方通行だとやっぱり学生さんは地域活動に参加しづらい。そういった意見が今までの連絡会で分かってまいりましたので、一緒に活動するということはどうなんだろうと。一緒に活動することによって、お互いの考えとか思いというところが分かり合っというところで、そういった形での活動ができないかなということで、令和5年度、まず模擬体験会みたいな形で、去年、ご報告させていただきましたけれども、ボランティア支援室

を利用させていただいて、地域で活動している方の活動内容に学生さんが参加していただいて、一緒に活動をしてみるということをやらせていただいて、その年の連絡会におきましては、その体験を基にしまして、じゃあ、実際に学校内であるとか、そういった決まったところではなくて、地域の人と学生さんが一緒に活動するためには、どんなことができるだろうかという基幹をつくりましょうということを昨年度の連絡会ではやらせていただいております。

それで、令和5年度は、企画書を作って、年間の季節のイベントを地域の人と学生と一緒に企画して活動するみたいな、そういった案が選ばれたりもしたんですが、その企画書を基にして、実際に企画書どおりというわけではないんですが、令和6年度の私たち赤羽圏域の活動といたしましては、学生と地域の人とが一緒に活動するということを大切にすること、何かができないかということで、あまりにも1からのスタートだと、先に進まないというところで、盆踊りイベントをまず考えまして、そちらに対して、学生と地域の人と一緒にイベントを進めていくためにはどうしたらいいのか。学生と地域の人と一緒に話し合う場を持ちましょうと。企画会を実行するということをさせていただきました。

企画会では、学生って、試験もあつたりとか、夏休みもあつたりとか、そういったことであつて、じゃあ、学生と地域の人と一緒に集まって話し合うということは、結構大変なことだなと感じました。まず、学生さんもお忙しい中で、開催日時はいつにするのか、基本的なところを決めていく中で、8月だとまだ夏休みだし、盆踊りって夏のイベントだよね。そんな話から、赤羽の花火大会があつたということで、そういうところに意味づけすると、それと盆踊り大会をやるのも何か盛り上がるんじゃないかなという考えで、そういった企画会が出まして、その日に開催を決定しているという形となっております。

また、場所に関して、まず、当初は東洋大学、大学内であれば、ある程度の設備も整っているでしょうし、地域の方もあちこちから集まりやすい、駅のそばでもあるので集まりやすいのかなと思っていたんですが、企画書を作成して、提案ということまでしたんですけども、ちょっと大学さんのほうから使用が不可だよというお返事をいただきまして、じゃあ、どこでやるんだというところで、1からの検討ということで、地域の人が集まりやすく、学生も分かりやすく、なおかつ、多少雨天でも開催できるかなというところ。あと、音出ししても大丈夫、ここら辺がちょっとポイントなんですけども、そ

ういった場所を決めるというところが非常に難しい状況でした。最終的には、赤羽北ふれあい館、公共的な場所をお借りしてという形で開催させていただいております。

そこで今度、盆踊りイベントに関しましては、どんな企画をしたら盛り上がるだろうねという話をしまして、参加者に楽しんでもらうために、何したらいいのかというところで、まず、盆踊りということで、浴衣の着つけであるとか。その浴衣を着て写真を撮りたいよね。じゃあ、フォトスポットを設置しましょうというところ。あと、みんなで盆踊りだけじゃなくて、もう一つ何か一緒にやりたいよね。じゃあ、ビンゴ大会をやったらどうというところで企画会のほうで話が進んでおります。

それで、9月28日に盆踊りのイベントを開催させていただいたんですけども、一旦ちょっと、映像ですけどご覧いただいております。

(動画視聴)

ありがとうございます。

当日は非常に盛り上がったかなというところではあるんですけども、学生も地域の方も、何よりも楽しめたということが、意味があったかなというふうに思っております。

ここまでの内容を12月7日の連絡会ではご案内させていただきまして、当日、グループワークといたしまして、先ほど言いました地域で活動している方であるとか、東洋大学の学生さん、あと、東洋大学のボランティア支援室の職員さん、先生、そういったところにもご参加いただきまして、北社協さんにもご協力いただきまして、グループワークのほうをさせていただきました。

そこで、盆踊りイベントに関する感想というところをまずお尋ねさせていただきまして、学生からは盆踊りってあまりなじみがなかったんだけど、着つけをしてもらい、貴重な体験ができた。盆踊りイベントを評価する内容と学内での周知方法など、今後の取組に目を向けた意見もございました。地域の人からは、学生からエネルギーをもらった。企画力の豊かさや柔軟な発想力を感じたなどの意見がありました。

一方で、夏場にこの内容を話し合う企画会を東洋大学で開催させていただいたんですが、地域の方で企画に参加いただいた方には、やはり、ちょっと交通手段のよくないところからいらっしゃった方、夏場ということもあって、暑い中、そういった企画に参加すること自体がちょっと大変だったと、現実的なご意見もいただいております。

赤羽圏域全体で見た場合で、話合いの場を持つという場合は、じゃあ、どこだったらいいのかなというような課題もあったかなと思います。

グループワーク 1 の続きとして、感想の内容としましては、そのほかに先生から、地域の学生に対する苦情も実際あるそうなんです。学生さんが路上でたばこを吸ってというようなことで、街が汚されるみたいな、そういった話もあってということも聞いておまして、学生と地域の交流が進めば、地域との隔たりもなくなっていくんではないかという、そういったご意見もいただいております。

そうしましたら、グループワーク 2 としまして、今後も緩やかにつながるためには何ができるかというところを再度みんなで話し合っという形になっております。

赤羽エリアの特性を生かして、神社仏閣と一緒にめぐって交流を深めるのはどうだというアイデアも具体的にはありました。そのほか、多く聞かれた学生側からの意見としましては、安心して気軽に参加できる場所。例えば、桐ヶ丘で開催されている朝活などなんですが、決まった曜日、時間、場所に行けば気軽に参加できる。そういった場所が多くあると参加しやすいという考えをいただきました。現実的には、9 時からの開始の活動であれば、1 限を履修していなければ参加できるんですけど、10 時からの活動になると、1 限と 2 限を休まなければいけない。空いていないと参加できない。そういったところで、活動時間によっても参加のしづらさなんか、具体的なものが見えてきたかなというところもあります。

まとめといたしまして、学生と地域のつながりについては、令和 3 年度から 4 年間取り組んできました。今年度は盆踊りイベントを開催することができて、形にすることができてよかったかなとは感じております。東洋大学、特に S D G s の学生さんと一緒に活動してきたんですが、来年度も S D G s の学生さんからは、一緒にイベントなどに取り組みたいという、学生さんのほうから圏域の包括のほうにお声がけをいただいております。実際、1 月と 3 月には今後の方向性について、顔を合わせて話合いの場を持ったりしております。ただのイベント開催をするということよりも、より多くの学生が地域に関わるつながりのきっかけとなる、そういったものであればいいなというふうに考えて、これからも活動していきたいと思っております。

最後に、これ、4 年間の活動なんですけど、令和 3 年当初は、赤羽圏域の地域包括と東洋大学の先生との結びつきというところ、あと、地域との結びつき・・・主立ってというところの関係性しかなかったんですが、4 年間の活動を通じまして、先生、学生というところも当然なんですけど、東洋大学のボランティア支援室の皆さんであるとか、国際部の皆さんと、そういったところとの関係性も多く築くことができました。あと、学

生と地域が直接つながるという形も見えてきたかなと思います。

今、図で示しております線がより太くなるように、学生と地域、その他の関係者の関係性が強くなっていく、そういったことを望みながら、今後も活動をしていきたいと思っております。

赤羽圏域からのご報告は以上となります。ありがとうございました。

【生活支援コーディネーター】

それでは、続きまして、滝野川圏域のほうも報告させていただきます。ちょっと切り替えさせていただきますので、お待ちください。

【滝野川西地域包括支援センター】

滝野川圏域のご報告をいたします。よろしくお願いします。

滝野川圏域の地域包括ケア連絡会が昨年の11月26日に北とびあで行いました。王子、赤羽さんと結構、年度を超えて取り組んできた課題が今、発表ありましたが、滝野川圏域も令和4年度、令和5年度は、検討した内容で包括ケア連絡会を行っていたんですけども、令和6年度に関しては、新たな視点で連絡会を行っております。

令和6年度のテーマは「社会的孤立の予防」～ひとりひとりが地域で輝くために～です。独居、男性の社会参加、8050問題など社会的孤立に関連する課題が深刻化していく中で、定年退職後の役割喪失する時期も多様化してきています。今年度の連絡会では、地域で孤立している人はどんな人なのか、孤立している人にどんな声かけをしたらよいのか、社会的孤立を予防していくためにはどうしたらよいのか、地域で孤立している人、孤独な人に気づき、つながり、つなげ、見守るためにどのような地域づくりが必要かなどといったことをミニ講座や事例、情報交換を通して考えていきました。

参加者の所属内訳です。シニアクラブ、町会・自治会、民生委員、自主グループ、障害者の事業所、介護保険ケアマネジャー、デイサービス、こんちゃんサポーター、薬局、整骨院など様々な分野から合計44名の方が参加されました。

グループワークの時間では、フォーマルな団体、インフォーマルな団体の垣根を超えて意見交換を行いました。

自由発表の前に、社会的孤立について共通認識を持ってもらうため、ミニ講座を行いました。社会的孤立とは、家族やコミュニティとほとんど接触がない状態をいいます。本人の感情とは関係なく、他者とのつながりのない状態です。今の世の中は、つながりやコミュニティが希薄になりつつあります。このような状況が孤独や孤立をもたらし、

心身共に影響を与えています。

孤立というと、社会とのつながりや助けのない、あるいは、助けが少ない客観的な状態です。それに対して、孤独というと「独りぼっち」と感じる心の状態を指していて、その人の主観の問題や個人の責任と捉え方をしてしまうかもしれません。

しかし、孤独、孤立はその人個人の問題ではなく、そのとき、そうならざるを得なかった環境要因や社会の変化が大きく変化しています。孤独感や社会的孤立は高齢者だけではなく、子どもや若者、働き盛りの青年層まで老若男女問わず関係してくる問題です。そのため、社会全体で対応していかなければならない問題であると考えております。

ここからは、当日発表した事例を紹介していきたいと思います。

最初の事例は、他の地域から北区に転居してきたAさん、78歳男性についてです。

Aさんは、約10年前に北区へ転居、2階建ての一軒家で独居の方です。転居後、自治会の活動に積極的に参加してきたことで、飲み仲間もできました。

そんなAさんですが、数年前から体調不良が続いていました。地域の飲み仲間がいつも18時過ぎには2階の寝室に電気がつくことや、夜に一人で外出しないことなど、Aさんの行動パターンを知っていました。

ある日、電気がついていないことをおかしいな、いつもと違うぞと気づき、訪問したところ、自宅の2階で倒れており、救急搬送となりました。Aさんが再び自宅で生活することはできませんでしたが、地域とのつながりがあったからこそ、早期に異変に気づくことができました。

二つ目の事例です。こちらは、定年退職をきっかけに地域デビューしたBさん、67歳男性についてです。こちらの事例に関しては、当事者の方に登壇してもらい、実際の体験談を語っていただきました。

Bさんは、北区で生まれ育ちながらも、会社員時代は多忙な生活を送っており、地域との関わりはほとんどありませんでした。Bさんは、63歳になる年に定年退職。定年退職直後は、何をしてもいいか分からずに、食べて、飲んで、寝ての生活の繰り返しでした。そんな生活が3か月も続くと、体重は増加し、体もむくんだ状態になりました。危機感を覚えたBさんは、顔のつながりのあった自治会の役員へ相談。自治会の配り物を行うなど、身近なところから地域参加するようになりました。

Bさんは、現在も自治会の役員をしており、防犯・防災活動、ご近所体操教室のリーダーとして活躍しています。地域デビューしたことにより、住民との交流の機会が増え

たことはもちろん、Bさん自身の筋力アップを実感、また、趣味の時間とのバランスを取りながら、自分自身も地域活動を楽しむことをモットーにしているそうです。

今、ご紹介した二つの事例を基に、グループワークを行いました。グループワークの内容としては、画面に表示されているとおりです。具体的な感想や意見としては、2事例とも「参加者自身のこれから」と重ね合わせて、同じ目線で考えられる内容だった。孤立は高齢者だけではなく、誰にでも起こり得る。知恵を出し合い、関心を持ってられることに未来に明るさを感じた。地域で包括的にというより、個別性や選べる社会参加の種類があればいいと感じたというような声が挙がりました。

最後に、まとめです。定年退職後、いかに早く地域活動へ参加をできるかが課題に挙がりました。65歳以上の方でも仕事をしている人の割合は多く、仕事を持ちながらも参加できるコミュニティの必要性が高まってきています。このような課題に取り組むため、滝野川圏域の生活支援コーディネーターの集まりでは、高齢者の分野だけではなく、多様な関係機関とつながれる方法はないか模索しているところです。

これで滝野川圏域の報告を終わります。ありがとうございました。

【生活支援コーディネーター】

以上が3圏域の報告になります。資料のほうはそこまで終わっているかなと思うんですけれども、ちょっと私のほうから、もう少しだけお時間のほうをいただきまして、話題提供ということで、滝野川圏域から出た意見・課題のことをちょっと皆さんにお話しできればなというふうに思っております。

今回、滝野川圏域の事例、そして、王子圏域もそうだったんですけれども、孤立防止が一つ大きなテーマとなっていました。地域の方々と意見交換をしても、孤立している人たちに対して、地域に出てきてもらうアプローチは、やっぱりもう難しいと。なので、退職前とか、もっと孤立する前から何とかアプローチできないかなというふうに私たち自身も実感をしております。

あと、一方では、民生委員さんとか自治会の役員さんの方々からも、成り手不足の問題も深刻だということも挙げられておりました。どうしたら若い世代に、生活支援コーディネーターとして地域活動に参加してもらえるようにアプローチできるかというところを今回、滝野川圏域と話し合いをしております。

一番初めに出てきた課題が、出会いがないという、ちょっとこう言ってしまったら元も子もないという話になってしまうんですけれども、もともと生活支援コーディネータ

ーが所属しているのが高齢者あんしんセンターなので、高齢者あんしんセンターで介護保険の申請とか、どちらかというと、あまり元気ではない方々とか、その家族とか訪れる場になっているので、通常の窓口にいるだけでは、やっぱり若い世代の方との出会いというのはとても少ないんですね。あとは自治会に関わっている方とか、民生委員さんのように地域活動をしている方々にはもちろん会えるんですけども、一般的に65歳以上が高齢者というふうに言われていますけれども、現在はお仕事している方も多いですし、高齢者と呼べないような元気な方々が地域にたくさん本当はいらっしゃるということ自体も認識しています。ですが、今はなかなか接点を持てないというのが、やはり一番大きな課題かなというふうに思っています。

そして、働きかけるタイミングは定年後なのかというところも、一つ話題として挙がりました。ライフスタイルの多様化によって、働きかけるタイミングも難しいという意見も出ています。滝野川圏域のメンバーが、先ほど発表した須崎さんはとてもお若いんですけども、私自身もなんですが、退職が少しずつ見え始めてきたミドル世代と言われるのかなというふうに思っていますが、私自身も仕事が忙しくて、このような仕事をしていても、やっぱり自分の住んでいる地域とあまり触れ合えていないというのが、実は私たち自身も振り返ってみると、それが実情という感じです。なので、高齢者になったら私も孤立してしまうかもと、実は私も思っている、不安を抱えているような世代かなというふうに思っています。

そう考えると、退職後と限定せずに、漠然とした不安を持っている人たちに対して、気づきにつながるような機会があればという話題も出ていました。

こちらは八王子市の事例になります。八王子市は、2003年から定年退職したお父さんが、地域で生き生きと過ごしていただくきっかけづくりとして「お父さんお帰りなさいパーティー」というのを開催していたんですね。ですが、10周年たつと時代が変わって、名称も「地域デビューパーティー」、通称チデパというふうに変更されたそうです。新コンセプトとしては、年代、男女、勤労の有無を問わず、市民に市内の市民活動団体等を紹介して、地域デビューのきっかけを提供するというようなコンセプトにされているそうで、八王子市NPO実行委員会などが主催となって開催されています。

課題の三つ目ですが、多様な人々、多様な興味の方向性というのを挙げさせていただきました。今までは孤立予防のため、地域に出てきてもらうきっかけづくりとして、地域のサロンであったり、あとは体操の体験会なんてどうですかなんてお声かけして、た

くさん開催してきました。ですけれども、働いている方とか、皆さんの興味の方向とかも変わってきていて、今後は多様な活動を紹介し、まずは興味のアンテナに引っかかる誰かのグループなどにつながってもらって、お互いに見守り合うような土壌を支援していく流れに変わりつつあるのかなというふうにも感じています。そのために、これまでのように包括支援センターや社協が社会資源を頑張って創り出すというよりも、現在ある様々な社会資源とネットワークを・・・ながら協働していくのも大事な役割だなというふうに感じております。

こちらは東京都のほうで出されている高齢者あんしんセンターに無料配布されたというふうに聞いています、フィフティ・アップBOOKというものです。出されたのが東京都高齢者施策推進部在宅支援課新興課が作成したそうで、50代、60代を対象に、男女、勤労の有無を問わず、仕事や趣味、社会貢献など、地域デビューのきっかけを考えるヒント情報が載っている冊子ですね。こちらのほうでは、プレシニア世代から今後のライフスタイルのターニングができるように、仕事、学び、趣味、社会貢献を紹介しています。自分の興味・関心を大事にしながら、今後の体力や近隣とのお付き合いを大事に考えて、ただの老後の趣味紹介ではなく、いろんな活動のヒントにつながるようなヒント集となっています。

そんな滝野川圏域で振り返りをした後なんですけれども、私もたまたま見つけてびっくりしたという話なんですけれども、多様な人々へ多様な興味を引き出すために学び合うイベントとして、北区でも多世代に働きかけるすてきなイベントをやっているのをたまたまチラシで発見したんですね。この学びステップアップフェスタというので、第1回と書いてあるので、今年がまさに第1回目です。まさに多世代、特にプレシニア世代に響く、学び直しであったりとか、多様な地域活動につながるイベントだったのかなというふうに思っています。

主催は北区の教育委員会さんで、残念ながら、ちょっと私は行けなかったんですけれども、・・・生活支援コーディネーターに、こんなのあったよと言ったら、ほかの職員も気づかなかったという方が多かったです。教育委員会さんと言えば、北区の中でことぶき大学というのを毎年開催されていて、すごく本当に多様な趣味に働きかけるような内容になっています。

そして、今日、委員もお越しいただいていますけれども、学びという観点では、商店街の皆さんも一日講師になっているまちゼミなんかもありますので、これもすごくすて

きな企画だなというのを、実は街の中にも、北区の中にもたくさんあったんだなというふうに私も感じました。

こちらは埼玉県の事例になります。埼玉未来大学という形で、プレシニア世代、シニア世代をメインターゲットとし、就労や地域づくりの担い手としてのキーパーソン育成などに取り組んでいらっしゃるというふうに聞いています。

こちらの大学は、実は北区ともちょっと縁が強い、赤羽でNPO法人コミュニティビジネスサポートセンターがやられている代表理事の永沢映先生が理事長を務められているというふうに聞いていまして、シニアの学び直し、再チャレンジの応援がキーコンセプトというふうに聞いています。昨今の地域活動のニーズや、社会参加による健康増進などの関わりを学び、地域に根差した人生100年時代を応援するカリキュラムになっているというふうに聞いております。

地域の大学まで突然、何か話として発表させるのは、私自身ももちろん難しいなというふうに思っているんですけども、まずはプレシニア世代、若い世代に興味を持ってもらうべく地域でつながり合えるきっかけづくりから取り組めないかなというふうに感じております。初めは重くなり過ぎず、イベントなどを通じて地域への興味をきっかけに、行く行くは地域で継続して活躍してもらうような連動性につなげていくのが長期目標というふうに考えています。

その第一歩として、まずは他分野、他部署である方々とも顔の見える関係になって、若い世代への働きかけについて、意見交換をするところから始められないかなとか。あとは、今ある学びのイベントのところに講座の1コマとして、ちょっと入れていただいて、ここに挙げさせていただいたのは、先生も長寿の研究所のほうでやられている、すてきなプレシニアのためのライフスタイルチェックというので、私も思わずこれ、やってしまいましたという話なんですけれども。プレシニア世代にライフスタイルをチェックしようという、スマホでできるようなすてきなアプリを開発されたそうで、そういうような簡単な入り口からきっかけづくりをして、これからの継続、連動性につなげていけないかなというふうに思っています。

ちょっと長くなってしまいましたが、話題提供のほうで入れさせていただきました。

1層生活支援コーディネーター、2層生活支援コーディネーターの話題提供は以上になります。

【委員】

ということで、今まで介護予防というと、本当に、ちょっと弱ってきた高齢者みたいなことが割と対象ということだったんですが、もうちょっと前のところから、あまり介護にならないようにみたいな話だと、参加しにくい人たちもいるので、そういう意味では、地域とのつながりをまず持って、社会参加できるところをやりましょうということで進めております。

今、ちょっとお伺いしたのが、これ・・・裏を見ていただくと、J Rの駅でいろんなスタンプを押してもらおうと、最後に社協でちょっと景品がもらえるよというイベントを去年もやって、今年も今やっているんですが、これ、お子さんなんかは春休みにやってくれたらいいなと思ってやったんですが。今これ、3月6日から始めて、ゴールが社協なものですから、ここへ来るのがみんなおじさんなんです、これ。子ども、全然、二人ぐらいしか来なくて、100人以上はおじいさん寄りのおじさんが一人で回って、いや、暇だからやってきたよみたいなおじさんが毎日、社協に入ってきていただく。言い方はどうか、おじさんホイホイみたいになっていて、おじさんは外に出ないというけど、こんなに来るのかと思うぐらい来ている。

全然、介護予防とか、男性も外に出ようなんていう目的で始めたんじゃないんですが、今、結果としてそんなような状況になっていて。やっぱり今までのサロンみたいなところには、何となく足が向かなかったけれども、こういうのだと毎日のように歩いて、スタンプを押して回っているみたいな人もたくさんいるんだということがあって。どういうふうにしたらいいのか、まさにプレシニア世代のような男性がたくさん、図らずも社協に来てくださっているということで。もうちょっとこれ、いろいろなものに伝えられる戦略を立てておけばよかったなということも思っているんですけども、そういうのも含めて、いろんな社会資源がある中で、これから介護予防ですとか、あるいは社会参加だとかということを進めていけたらいいなと思っております。

以上です。

【会長】

ありがとうございました。物すごく、いろいろとリアルな情報をいただきまして、非常に参考になったかなと思います。

せっかくの機会ですので、委員の皆様、ご意見、ご質問等、いかがでしょうか。

委員、お願いいたします。

【委員】

先ほど、東洋大学の学生さんのお話があったんですけれども、大分学生さんに参加していただくというか、そういう活動というのは、すばらしいなというふうに思ったんですけれども。参加していただく学生さんというのは、SDGsの学生さんというのは資料に書いてありましたけれど、集まりがあるんですか、それとも学部とかある程度に声をかけたりとかして集めていくんですか。一人でも多くの学生さんに参加していただいて、若いうちから高齢者の方に対する意識を持ってもらうというのは大事だと思うので、一部に限定しないで、できれば多くの学生さんに参加していただくような、そういう声かけをお願いしたいなというふうに思うんですけど。

【浮間地域包括支援センター】

ご質問ありがとうございます。

そうですね。今回、地域の皆さんと学生が共に活動するという趣旨の内容で話を進めていくというところで、まず、東洋大学さんのほうにご相談しましたら、SDGsの学生さんたちをご紹介いただいたというところでのつながりになっております。そのほかにも今まで、先ほどもお伝えしましたが、大学の先生たちとも親交がございまして、全生徒をご紹介いただいたりであるとか、そういった広く一般的な学生さんではないんですけれども、そういった対象となる学生さんが増えていっているというところは事実かと思います。

おっしゃるとおり、広く一般的な学生さんが参加いただくにはどうしたらいいのかというところは、まだ今後の課題として残っている部分ではありますけれども、そういったところを考えながら、できることを続けていきたいなというふうに考えております。

【委員】

ありがとうございます。なるべく学生の頃からそういう意識というものを持つと、今、民生委員の成り手が少なくなっているというのもあるんですけれども、そういう声がかかったときに、意識して受けてもらうとか、今、プレシニアですか、そういうのも意識につながっていくのではないかなというふうに思いますので、そういう意味で、一人でも多くの学生に参加していただくような方向で進めていただければなというふうに思います。

【会長】

ありがとうございます。今、委員がおっしゃいましたこと、非常に私も重要なと思

っております。多くの学生さんが4年間の中で体験して、そのまま企業に就職される方も多いかと思うんですけども。中には、やっぱり地域での活動に魅了されて、そのままなっていますかね、コミュニティに立脚したビジネスに走っていく方、あるいはNPO何かでいく方も中には散見されます。

その一番、多分いい例が永沢さんだと思うんですね。彼のお弟子さんなんかも、やっぱり学生時代に社会活動で地域の方と触れ合って、そのままそれが半分お仕事になってというようなことで、実際、その地域で活躍されている方も多いかと思うんですね。

やっぱり今後、地域づくりをしていく中で、まさしく本当の無償の地域の住民さんだけの活動というのは限界あるわけですし、そういう意味では、やっぱりNPOですとか、あるいは社会企業といいますか、コミュニティを、それをビジネスにするような方々の若い人たちが育ってくれるということも非常に大事だと思ってまして、そういう意味では、そのきっかけになる一番な大事な問題だと。数は求めることはできませんけれども、本当に100人に一人、二人でも北区へ定着して、そのままライフワークにするような方が出てきたらいいでしょうし、また、それを支援する、その人たちが生活できるようなお金が回るような仕組みも大事だと思いますので、そういう意味で、本当に東洋大さんとの関わりというのは大事なチャンネルかなと思いましたので、ぜひ、またこれからも大事にして、育てていただければと思います。

ほか、いかがでしょうか。

【委員】

これもちょっと、一応要望なんですけども、例えば、あんしんセンターでは、本当にいろいろなすばらしい活動をして、大変お世話になっているので、本当にありがたく思っています。先ほど、滝野川包括から説明がありましたけども、包括ケアのセンター長が今、正式には不在なんです。それで、病気でちょっと退職されちゃったので、その後、本来だったら、すぐ来てくれれば、いろんな活動ができるんですけど、ほぼ2年ぐらい後釜がないんですよ。こういうのをすぐ補充をしていただくようなことはできないんですかね、センター長の。

というのは、中がずっと私たちの地域では、年に3回から4回、センター長と打合せをして、うちの町会は4ブロックに分かれているんですけど、みんなが集まると。さらに、その中で見守りの責任者というのを設けています。それで、みんなで約20人ぐらい集まって、ここのおじいちゃんはどうだ、ここのおばあちゃんは、最近見ないけど、

どうだとチェックをしながら。いないと、行って確認を取るという行動をしているわけですが、この行動が今、センター長がいなかったために、2年ぐらいできない状況になっている状況なんです。これも本当に心配なところでございまして、例えば、センター長が病気で退職されたら、すぐその補充をしていただければ、本当にうれしいんですけども、その辺、ちょっとお聞かせ願いたいんですけども。

【事務局】

各高齢者あんしんセンターについては、業務の委託という形を取らせていただいているので、それぞれの受託法人のほうで人材の確保ということをやって、努力していただいているところなんです。なので、やはり今、あんしんセンターが地域の中で活躍し、担っている役割は大変大きいということは、高齢福祉課のほうでもというか、区全体として、そこは認識していて、人員配置が適切に行えるように、そこをどうしたらいいかというところは、やっぱり現場の声も聞きつつ、それから、私たちでもできることを今、本当に検討していますが、続いていて申し訳ないんですけども、そこは検討を続けていきたいなというふうに思っているところです。

法人さんのほうでは、本当にこの業界、なかなか介護ですとか、福祉の業界だけじゃなくて、今、本当にどんな業種でも人手不足、町会・自治会さんとかでは成り手不足、そういった人材確保が課題なので、そこもどうしたらいいかというところを相談しながら、地域の方のお知恵もいただきながら検討していきたいなというふうに思っているところです。

以上です。

【委員】

ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

【会長】

では、委員、まさに地域活動団体のお立場から、いろいろアドバイスなりご意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

【委員】

そうですね。うちの活動は、主にベーゴマが主軸なんですけど、月に2回活動していて、そのうちの1回のほうは、ベーゴマに限らず、ジャグリングだったり、ボードゲームだったり、ボール遊びだったり、バドミントンだったり、何でもありみたいな日を設けております。そうすると、ベーゴマだけに限らず、地域の子どもたちの居場所づく

りみたいな意味合いもありつつ、ボードゲームのところには、マージャンができるところも設置してしまして、マージャンができるところに。そうすると、子どもを連れてきて、子どもにベーゴマさせておいて、おやじたちがみんなマージャンしているんですよ。楽しくてしょうがないんですよ。そこに地域のおじいちゃんに参加されても全然大丈夫なんですね。

うちはもうオープンで、朝10時から夕方5時までずっとやっているんで、地域の方に来ていただけると本当にありがたいんですが、情報がやっぱり地域に浸透させるのがすごく難しくて、うちの活動はもう10年以上になるので、ベーゴマだけで考えると。そうすると、大分長くはなってきた、コロナ以降でも、もう5年ぐらいたつので、そういう活動をし始めて5年ぐらいたっていても、やっぱり地域に浸透していかないというのは、僕らの中ではやっぱり課題です。そこが地域とうまく、それこそ地域の自治会さんとうまく連携が取れて、例えばその掲示板に、うちはこんなことやってますよ、来てくださいと貼れるといいんですけど、大分昔に、開催する前に引っぺがされた経験があって、担当の方にすごく印象が悪かったみたいで、それからもう、じゃあ、地域の自治会はいいやみたいな形になったこともあったりして。今は自治会さんとの関係が悪くなったりとかはしていないんですが、それをお願いしづらいなとか、やっぱりあったりするんですね。そうすると、やっぱり自治会の方々も、もう大分世代が変わっているので、10年前と全然違うので、うまくやっていけるかもしれないんですけど、うまくやっていけないかもしれないので。そうすると、僕らも自治会に首を突っ込んでいけないところもあって、どうしたらいいのかなと思いつつ、ずるずる来ているみたいなのところもあり。

あと、大学の学生さんとかも来ていただいているんですね、実は。そんなに多くはないんですが、向こうの都合が合えば来ていただける形ではしていただいているんですが。例えば、ライフデザインの方だけではなくて、例えばもうちょっと運動系の学部も来られているので、今、スラックラインを張ったりもしているので、そういうところで運動系の学部さんともうまく連携が取れたりしたら、もうちょっと大学との関わりも広がりを見せられるんじゃないかなとか考えたり。

あと、ボノドアさんという東洋大学の中のボードゲームのサークルさんもあって、こちらがインスタグラムを立ち上げていたので、ちょっと声かけて、ボードゲームを置いているので、もしこの場で一緒にやってもらえたらありがたいな、なんていう話もした

りとか、ちょっとずつはやってはいるんですが、やっぱりそれぞれの思惑が違う。うちだと大分にぎやかなので、ボードゲームを主軸にしているわけじゃないので、ちょっと難しいかなということで、そこは一緒にやるということはしなくなったんですが。そういうもうちょっと踏み込んだマッチングみたいなのところができる場が。

以前にマッチングしてくれていたじゃないですか、何年か前にね。それも1回切りだったじゃないですか、年に1回というか。1回切りだと、都合がつかないと行けないんですよ。1回行けないと、もう一生台なしじゃないですけど。ではなく、学生さんと年に、例えば2回なり3回なりのうちの1回行ければ、関係づくりができるとかということも視野に入れていただけると、学生さんたちが来る・・・毎回違ったりもするかもしれないので、何か考えていただけると、僕らとしてはありがたいなと思っております。

【会長】

ありがとうございます。

本当に場の重要性というものも大きいかなと思うんですね。それには、どういうプログラムをやっていて知名度を上げるとか、いつでも、どこでも、そこへ行けば分かるといったような場というのにも必要かなと思っております。

私たちもいろんな研究なんかでも、モデル事業とかを見ているすと、多様な居場所づくりの事例とか、テレビなんかでも結構やっているんですね。ドキュメンタリー番組関係なんかで。そういう場所の中で、いかに一つは条件が合えば、常設の場というのがあれば、非常にいいのではないかなと思って見ているところです。

残念ながら、寺田部長はご退出いただいたんですけど。北区さんも、例えば空き家利用とか、そういったものに関しては非常に支援をなさっているようでして、これ、ちょっとネットで見えてきたんですけども、地域公共のために空き家を利用されているような方々には、区のほうでいろいろ、立会いですとか、そういったものを支援されていて。あとは、東京都のほうでも、そういうのもやっているんですね。そういったものを利活用していくということも、特にNPOとか、そういったところなんかでしたら、大事だと思いますし。

あとは、商店街さんなんかですと、空き店舗なんかも、完全に同じだけのテナント料ですと、ちょっと厳しいかもしれませんが、それが直接、間接的にそこがあるので、お客さんが流れ込んでいくような仕組みということで、空き店舗をうまく活用されているような事例何かが板橋区なんかでも多々あるんですね。そういった常設型のスペース

を今後は考えていくというのも場づくりですとか、孤立対策というのにも重要なと思うんですけども。その辺り、今後、いろいろご見解があればと思っているところなんです。ちょっと残念ながら、寺田部長はお帰りになったので申し訳ないですが、委員、今日、ご発言もなかったところですので、何かそういう商店街を活性化するの同時に、こういった居場所づくりとか孤立対策といったようなものの何かアイデアといいますか、そういうモデルみたいなもので何かご示唆いただけるものがあれば、いかがかなと思います。どんなものでしょうか。

【委員】

先ほど、お話しいただきましたように、北区まちゼミが、これが今年の8月開催される予定なんですけれども、この3月15日に中央公園であおぞらまつりというのを開催させていただいたんですね。それで、やはり多くの店主の人たちが講師となって、来ていただく方々にいろいろ交流しながら行っているセミナーなんですね。これは北区全域に今、増やしていこうとしていますので、これはまた、ぜひともご参加いただけるときがありましたら、ご参加いただければありがたいと思います。

【会長】

ちょっと私の質問の仕方が悪かったのかもしれませんが、もちろん、そういうイベント的なマルシェとかも非常に重要だと思うんですけども、先ほど、いろんな活動団体とか、活動主体の方が商店街の一角で、ある店舗をちょっとお値打ち価格でお借りしてやっているNPOさんとか、あるいは社会企業家の方とか、どこの街でもたくさんいらっしゃるかなと思うんですが、そういったものに関しての北区での何か事例ですとか、あるいは考え方みたいなものがあれば、そういった。やっぱり常設の場と違って、そういったものの何かアイデアがあれば、参考になるかなと思うんですが、いかがでしょう。

【委員】

空き場所ってたくさんあると思いますけれども、まだちょっと私も収集できていないところもありますので、またその地域のいろんな事情をお話しできるようにさせていただきたいなと思います。

【会長】

ありがとうございます。せっくなので、やっぱりそういう場所があれば、商店街自体がにぎわうとか、・・・お互いの何かそういった社会利用というのものもあるかなと思います。また、ぜひいろんな情報があれば、ご提供いただければと思います。ありがとうございます。

ざいます。

【委員】

事例が一つ。よろしいですか。

滝野川の六丁目に稲荷湯という銭湯、ご存じですかね。ちょこちょこテレビに出ているんですけども。その稲荷湯さんが持っているところなんですけども、その裏側に大正大学の方たちが長屋形式を開いて、そこでいろんなイベントをやることになります。あと、そこで稲荷ずしを作って販売してくれたり、それがまたおいしいんですね。そういう事例を今やっているのでもし時間があったら、一回見に来ていただければと。おいしい稲荷ずしでも買って帰ればよろしいかなと思うんです。結構にぎやかにやっていますので、ぜひよろしく。一つの事例ということだから。

【会長】

ありがとうございます。長屋を使った事例というのは、非常に理想的な事例だと思いますので、恐らくそういったものが北区の中でもいろいろ探してみればあるかと思うしますので、ぜひまたその辺、社協さんも情報収集していただいて、ご提供いただければと思います。

【委員】

すみません、豊島高齢者あんしんセンターです。

先ほど、委員のおっしゃるとおり、私たち生活支援コーディネーターがやはり地域と人々、いろんなところをつなげ役という役割を担うべきだと思っています。

おっしゃるとおり、ベーゴマクラブさん、私たち豊島では、かむかむという男性の集まりとかのイベントにちょいちょいお手伝いいただいて、おかげさまで自立ができそうなぐらい男性たちが、おじさま方が子どもたち相手にベーゴマできるかなというところまでおかげさまで成長してきたという経緯がありますが。そんな中で、ご自身の場がなかなか地域に浸透しないみたいな。なので、そういうところに、町会さんとか、いろいろな機関、組織みたいなところにつなぐというのは、なかなか簡単ではないんですけれども、私たちコーディネーターが逆に言えば、個別に結構つながりをつくるのが得意な職種でもあったりしますので、そういう個人の方をそちらにつながって、そういう方の実績というか、楽しみとかも実感を持って、逆にその方が地域に戻られて、地域の方にその方が広めていただいて、気がついたら組織的につながっていたみたいなという役割を果たせたらなとは思っておりますので、1回のつながりだけでなく、本当に先々をも

うちちょっと見据えて、私たち、動いていくというのは改めて大切だなと思わせていただきました。ありがとうございました。

【会長】

ありがとうございます。

そろそろ時間になってまいりましたので、今日のお話を伺いまして、ちょっと認識したところがございます。

先日、たまたまちょっと内閣府の孤立・孤独対策の担当の方と高齢者施策のほうの担当の方が合同でヒアリングといたしますか、情報交換をしていたんですけども、これからの孤立・孤独対策というのは、従来の福祉優先型のコミュニティづくりでは限界があるであろうと。私もずっとそれを意見交換といたしますか、持論で持ってきたんですが、よっぽどの危機的な地域でないと、福祉だけで人というのは多分、動かないと思うんですね。もう、あちこちで孤立死が発生したとか、骸骨が見つかったとか、日夜あちこちで悲鳴が聞こえているというようなことになると、それは住民の方々も結束されると思うんですが、幸いにも北区あるいは都内というのは、もう本当にそこまで危機的なコミュニティというのは少ないと思うんですね。むしろ、そうだと潜在的に孤立している人、孤独な人というのが浮かび上がってこない、でも・・・予備軍がいっぱいいるという状態だと思うんですけども。

そういった中で、北区のほうも、もう一つのアプローチは街づくりとか、楽しさで集まるようなコミュニティが必要だと。その両方が歩み寄って、初めて一般の地域の住民の方々の目も開くというか、賛同を得られるんじゃないかというようなことで、意見を交換してきたところなんですけども。そういう意味では、これまでの福祉を中心とした課題解決というふうなアプローチと、もう一つはわくわくするような、今日、いろんな好事例もご発表いただきましたけど、学生さんと合流するとか、様々なプログラムで、わくわく楽しい部分、遊びの部分とそういったものの、両方の二本柱でやっていく必要があるかなと思いましたので。この創生会議の場というのは、その両方がクロスする貴重な機会かなと思いますので、今日もまた実例ですとか、学びをまた半年後とか1年後には集大成で出るかと思うんですが、常日頃、いろんな現場で情報交換していただいたりする機会でもって進めていっていただくと非常にいいかなと思いましたので、今日は本当にありがとうございました。

それでは、最後、副会長、締めを。

【副会長】

本日はお忙しい中、会議にご参加いただきましてありがとうございます。この前の会議から引き続きの方は、長時間にわたり大変お疲れさまでした。

それから、ご報告をいただいた皆様、非常に興味深く聞かせていただきました。ありがとうございます。改めてお礼申し上げます。

報告の中で、まず、王子圏域では社会資源クイズですか、これ、ずっと見ていて、アンケート結果のところで、役立つという回答がありましたけど、本当にそのとおりだなと、結構面白いなと思いながら聞いていました。その後のアンケートの下のところ、地域の仕組みを知らない人が多いというのは、この指摘は、はっとしたといいますかね。仕組みを知らない方が多いというのは、よくあるご指摘なんですけれども。例えば、我々行政が制度をつくろうとすると、格好よくとか、見栄えよくとか、そういう傾向が出ちゃうんですけど、でも、やっぱり大事なものは制度とか仕組みを知ってもらう。知ってもらった上で、理解してもらうことがまず第一になければならないという。そういった意味では、こういういろいろな手法、非常に参考になるなというふうに感じました。ありがとうございます。

それから、次は赤羽ですね。赤羽のほうは、東洋大学さんとの連携ということで、東洋大学さんには福祉に限らず、多くの分野でご協力をいただいている、北区にとっては大切なパートナーであって、こういう言い方は大変失礼かもしれませんが、地域資源とも言える存在だと思っています。しかもそこには、専門的な知識とか若者といった代え難い力があるわけです。この力を最大化するには、行政と大学というよりも、報告の中でもおっしゃっていましたが、地域の方と学生が直の関わりのほうがはるかに大きな効果がある、そういうふうに感じています。

同時に、この東洋大学に限らず、区内にある研究施設ですとか、あるいはスーパーなどの地域資源となり得るものであるとか、地域包括ケアを実現して、また、これを現在に合ったものにレベルアップするためには、こういった連携、活用というのは今後、前例にとらわれずに進めていく、こういった必要があるだろうというふうに感じております。ぜひ進めていただければなと思ってございます。

滝野川圏域のほうからなんですけど、これ、何となくいずれ自分にも降りかかるような事例、ご紹介いただいて、どうしようかなとか思っていたんですけど。まとめのところでご説明にもありましたが、仕事を持ちながら参加できるコミュニティの必要性と

いうのはありましたけど。これは、やはり定年が延びていることとかを考えると、そういう現代の社会変化、こういうのを見据えると、やはり考えるべきテーマなんだろうというふうに思います。本人の孤立・孤独といったことでは、地域コミュニティとか仕組みが必要であることは明らかなんですけれども、同時に、民生委員さんのほうからも話ありましたけれども、そういうコミュニティの担い手も不足しているというのも。これは定年延長が悪いというわけじゃないんですけれども。

ただ、一方で、この定年延長というのは大きな視点からいうと、日本の経済とか将来を考えると避けて通れない現実だと思うんです。これ、非常に難しい問題であって、それが……。ここに本日いらっしゃる方は全員、また、先ほど東洋大学ですとか、藤原会長がいらっしゃる健康長寿医療センターといったところの知恵を集めながら、あと、最後に小原さんからお話があったスタンプの話で、やってみないとどんな効果があるかわからない、そこから得られる経験、いろいろなことがあると思うんです。そういった知恵を集めて、押し進めていければなというふうに思いました。

本日は参考になる話、いろいろ聞かせていただきまして、大変ありがとうございました。引き続き、高齢者、障害者、それから孤独などを含む区の福祉について、ご協力をお願い申し上げまして、挨拶とさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

【事務局】

では、長時間にわたりまして、貴重なお話をありがとうございました。引き続き、またよろしく願いいたします。お疲れさまでした。